

## 「出題の意図」・「解答例」

選抜区分	2020年度（選抜区分：一般選抜後期日程） 経済学部（科目名：小論文）																																																																																																																																																																																																							
<p>一般後期日程の小論文では、日本財団子どもの貧困対策チーム著『徹底調査 子供の貧困が日本を滅ぼす 社会的損失 40兆円の衝撃』から一部を抜粋して課題文としました。この課題文は、子どもの貧困問題の存在が一般に認知されていないことや、世代を超えて貧困が連鎖するという問題を指摘する箇所です。平易な文章で書かれていますが、著者の主張を構成する論理に気を配って読解する必要があります。</p>																																																																																																																																																																																																								
<p>設問1および設問2は、課題文の内容を十分に理解した上で、制限された字数内で簡潔に要約する力を試す設問です。課題文の中で展開されている著者の主張の論理を理解することが求められます。設問3は、課題文の内容を踏まえたうえで、自身の考えを文章で論理的に表現する力を試す設問です。</p>																																																																																																																																																																																																								
<p>設問1の解答例</p>																																																																																																																																																																																																								
<table border="1"> <tr><td>現</td><td>在</td><td>、</td><td>日</td><td>本</td><td>で</td><td>問</td><td>題</td><td>と</td><td>な</td><td>っ</td><td>て</td><td>い</td><td>る</td><td>貧</td><td>困</td><td>は</td><td>、</td><td>最</td><td>低</td><td>限</td><td>の</td><td>衣</td><td>食</td></tr> <tr><td>住</td><td>は</td><td>満</td><td>た</td><td>さ</td><td>れ</td><td>る</td><td>が</td><td>、</td><td>教</td><td>育</td><td>や</td><td>持</td><td>来</td><td>へ</td><td>の</td><td>投</td><td>資</td><td>を</td><td>行</td><td>う</td><td>こ</td><td>と</td><td>が</td><td>難</td></tr> <tr><td>し</td><td>く</td><td>、</td><td>そ</td><td>の</td><td>結</td><td>果</td><td>「</td><td>貧</td><td>困</td><td>の</td><td>連</td><td>鎖</td><td>」</td><td>に</td><td>陥</td><td>る</td><td>可</td><td>能</td><td>性</td><td>の</td><td>あ</td><td>る</td><td>「</td><td>相</td></tr> <tr><td>対</td><td>的</td><td>」</td><td>な</td><td>貧</td><td>困</td><td>で</td><td>あ</td><td>る</td><td>。</td><td>し</td><td>か</td><td>し</td><td>多</td><td>く</td><td>の</td><td>日</td><td>本</td><td>人</td><td>は</td><td>貧</td><td>困</td><td>と</td><td>聞</td><td>く</td></tr> <tr><td>と</td><td>、</td><td>食</td><td>べ</td><td>る</td><td>も</td><td>の</td><td>に</td><td>困</td><td>り</td><td>、</td><td>着</td><td>る</td><td>も</td><td>の</td><td>も</td><td>満</td><td>足</td><td>に</td><td>な</td><td>く</td><td>、</td><td>外</td><td>見</td><td>か</td></tr> <tr><td>ら</td><td>判</td><td>断</td><td>し</td><td>て</td><td>「</td><td>明</td><td>ら</td><td>か</td><td>に</td><td>」</td><td>貧</td><td>困</td><td>と</td><td>分</td><td>か</td><td>る</td><td>よ</td><td>う</td><td>な</td><td>「</td><td>絶</td><td>対</td><td>的</td><td>」</td></tr> <tr><td>な</td><td>貧</td><td>困</td><td>を</td><td>イ</td><td>メ</td><td>ー</td><td>ジ</td><td>す</td><td>る</td><td>。</td><td>そ</td><td>う</td><td>し</td><td>た</td><td>貧</td><td>困</td><td>は</td><td>、</td><td>現</td><td>代</td><td>の</td><td>日</td><td>本</td><td>で</td></tr> <tr><td>実</td><td>際</td><td>に</td><td>見</td><td>ら</td><td>れ</td><td>る</td><td>こ</td><td>と</td><td>が</td><td>ほ</td><td>と</td><td>ん</td><td>ど</td><td>な</td><td>い</td><td>た</td><td>め</td><td>で</td><td>あ</td><td>る</td><td>。</td><td></td><td></td><td></td></tr> </table>		現	在	、	日	本	で	問	題	と	な	っ	て	い	る	貧	困	は	、	最	低	限	の	衣	食	住	は	満	た	さ	れ	る	が	、	教	育	や	持	来	へ	の	投	資	を	行	う	こ	と	が	難	し	く	、	そ	の	結	果	「	貧	困	の	連	鎖	」	に	陥	る	可	能	性	の	あ	る	「	相	対	的	」	な	貧	困	で	あ	る	。	し	か	し	多	く	の	日	本	人	は	貧	困	と	聞	く	と	、	食	べ	る	も	の	に	困	り	、	着	る	も	の	も	満	足	に	な	く	、	外	見	か	ら	判	断	し	て	「	明	ら	か	に	」	貧	困	と	分	か	る	よ	う	な	「	絶	対	的	」	な	貧	困	を	イ	メ	ー	ジ	す	る	。	そ	う	し	た	貧	困	は	、	現	代	の	日	本	で	実	際	に	見	ら	れ	る	こ	と	が	ほ	と	ん	ど	な	い	た	め	で	あ	る	。			
現	在	、	日	本	で	問	題	と	な	っ	て	い	る	貧	困	は	、	最	低	限	の	衣	食																																																																																																																																																																																	
住	は	満	た	さ	れ	る	が	、	教	育	や	持	来	へ	の	投	資	を	行	う	こ	と	が	難																																																																																																																																																																																
し	く	、	そ	の	結	果	「	貧	困	の	連	鎖	」	に	陥	る	可	能	性	の	あ	る	「	相																																																																																																																																																																																
対	的	」	な	貧	困	で	あ	る	。	し	か	し	多	く	の	日	本	人	は	貧	困	と	聞	く																																																																																																																																																																																
と	、	食	べ	る	も	の	に	困	り	、	着	る	も	の	も	満	足	に	な	く	、	外	見	か																																																																																																																																																																																
ら	判	断	し	て	「	明	ら	か	に	」	貧	困	と	分	か	る	よ	う	な	「	絶	対	的	」																																																																																																																																																																																
な	貧	困	を	イ	メ	ー	ジ	す	る	。	そ	う	し	た	貧	困	は	、	現	代	の	日	本	で																																																																																																																																																																																
実	際	に	見	ら	れ	る	こ	と	が	ほ	と	ん	ど	な	い	た	め	で	あ	る	。																																																																																																																																																																																			
<p>この設問に解答するためには、一般にイメージされる貧困が「絶対的」な貧困である点、実際に起こっているのは「相対的」な貧困であるという点、そして「絶対的」な貧困が日本では目にされることが少ないという点をおさえなければなりません。</p>																																																																																																																																																																																																								

設問2の解答例

日	本	で	は	、	男	女	間	の	賃	金	格	差	や	職	場	復	帰	を	促	す	社	会	イ		
ン	フ	ラ	の	不	足	等	と	い	う	社	会	構	造	的	な	問	題	が	原	因	と	な	っ	て	
、	母	子	世	帯	の	所	得	が	父	子	世	帯	や	一	般	の	世	帯	よ	り	も	低	い	傾	
向	が	あ	る	。	こ	の	た	め	離	婚	等	で	母	子	世	帯	に	な	っ	た	場	合	、	貧	
困	状	態	に	陥	り	や	す	い	。	こ	う	し	た	世	帯	は	、	子	ど	も	の	教	育	の	た
め	に	十	分	な	投	資	を	す	る	経	済	的	余	裕	が	な	い	こ	と	か	ら	、	世	帯	
所	得	の	差	が	、	子	ど	も	の	学	力	や	学	歴	の	差	と	な	っ	て	現	れ	る	。	
そ	し	て	こ	の	学	力	・	学	歴	の	差	が	成	人	後	の	所	得	の	差	に	反	映	さ	
れ	る	。	よ	っ	て	、	離	婚	等	を	き	っ	か	け	に	母	子	世	帯	と	な	る	こ	と	
で	、	貧	困	が	世	代	を	超	え	て	連	鎖	し	て	い	る	。								

この設問に解答するためには、著者の主張する以下の3つの因果関係をおさえなければなりません。①日本では（社会インフラの不足等を理由に）母子家庭の世帯所得は低くなり、母子世帯は貧困状態に陥りやすい。②所得が低い家庭においては、子どもの教育に十分なお金をかけられず、結果、世帯所得の差が学力・学歴の差となる。③学力・学歴の差が成人後の所得の差となる。よって①の因果関係をきっかけに、②と③の因果関係より貧困が世代を超えて連鎖することを説明する必要があります。

設問3 解答例

貧	困	の	連	鎖	を	断	ち	切	る	に	は	、	低	所	得	の	世	帯	が	低	教	育	と		
な	っ	て	し	ま	う	因	果	を	断	ち	切	る	必	要	が	あ	る	。	近	年	、	幼	稚	園	
か	ら	高	校	ま	で	の	授	業	料	の	無	償	化	が	進	ん	で	お	り	、	大	学	の	授	
業	料	に	お	い	て	も	低	所	得	世	帯	で	は	軽	減	さ	れ	る	制	度	は	多	い	。	
こ	れ	ら	の	よ	う	な	金	銭	的	な	サ	ポ	ー	ト	が	注	目	さ	れ	る	中	で	、	学	
校	外	で	の	学	習	を	サ	ポ	ー	ト	す	る	制	度	が	整	っ	て	い	る	と	は	い	え	
な	い	。	ま	た	、	子	ど	も	た	ち	が	自	分	た	ち	の	将	来	は	明	る	い	も	の	
で	あ	り	、	将	来	を	切	り	拓	い	て	い	く	た	め	に	は	ど	う	す	れ	ば	よ	い	
の	か	に	つ	い	て	考	え	る	の	を	サ	ポ	ー	ト	す	る	制	度	が	必	要	で	あ	る	。
こ	う	し	た	子	ど	も	た	ち	へ	の	き	め	細	か	な	サ	ポ	ー	ト	は	、	経	験		
豊	か	な	者	が	サ	ポ	ー	タ	ー	と	な	る	べ	き	で	あ	ろ	う	か	ら	、	必	ず	し	
も	ボ	ラ	ン	テ	ィ	ア	だ	け	で	は	十	分	な	サ	ポ	ー	タ	ー	の	質	と	量	は	望	
め	な	い	で	あ	ろ	う	。	子	ど	も	の	貧	困	問	題	が	、	国	の	将	来	に	関	わ	
る	問	題	で	あ	る	以	上	、	政	官	財	が	足	並	み	を	そ	ろ	え	、	将	来	へ	の	
投	資	と	し	て	、	サ	ポ	ー	タ	ー	雇	用	の	た	め	の	財	源	を	確	保	す	る	べ	
き	だ	と	考	え	る	。																			

この設問に対して適切に論じるためには、筆者が主張する、日本の「貧困の連鎖」のプロセスを踏まえ、各因果関係を断ち切るような具体的方策が示すことが必要です。例えば、「貧困の連鎖」を構成する因果関係の一つである「低所得世帯が低所得になりやすい」に注目するならば、それを防ぐ具体的な方策を提示することが求められます。設問に対して適切に論じられていることが重要であり、唯一の正答を求めているわけではありません。自身の考え方を適切に表現できることが大事です。